

孝明天皇紀

三十一

849  
1

巻入

卷五十七

安政二年

正月二月

卷五十八

安政二年

三月

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





孝明天皇紀卷五十七

安政二年正月一日乙丑四方拜例の如し今年假皇居に依て元日白馬踏歌の三節會を修め大床子御膳を供せり

非人日記正月一日乙丑晴四方拜第一朝御出御

宣二朝通入御奉行職事頭并光受朝臣其外總參中

殿代鋪設六位侍中沙汰也

實久御記正月一日乙丑晴今年假皇居依之無三節

會

二日丙寅晴今年無大床子御膳

總長御記正月元日乙丑晴宣刻過四方拜出御之首



孝明天皇紀卷五十七

安政二年卯乙正月一日丑乙四方拜例の如し今年假皇居

に依て元日白馬踏歌の三節會を停め大床子御膳を

供せす

非藏人日記正月一日乙丑晴四方拜寅一刻前出御

寅一刻過入御奉行職事頭辨光愛朝臣其外總參

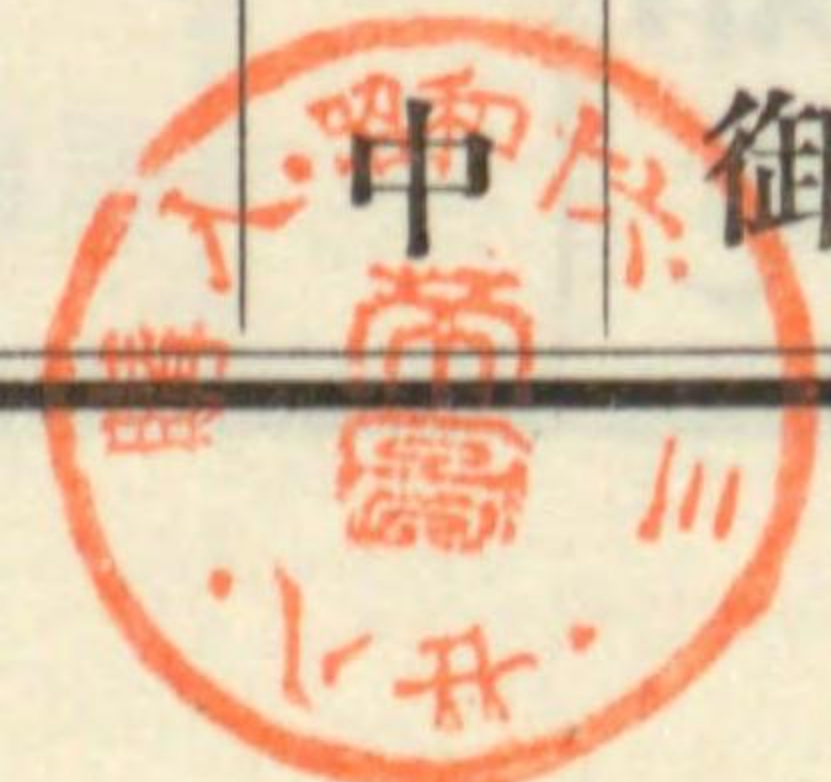
殿代鋪設六位侍中沙汰也

實久卿記正月一日乙丑晴今年假皇居依之無三節

會依無其所也其

二日丙寅晴今年無大床子御膳

聰長卿記正月元日乙丑晴寅刻過四方拜出御之旨





議奏被示兩役參御前所小代御御服高宮內卿了御洗手  
女房出御于中殿代御御裾胤實麗朝臣男方供奉從中殿  
代東庭下御皆諸臣訖入御如供奉寅半刻退出

〔言成卿記〕正月元日子刻は○子の恐誤く禁中四方拜於假  
皇居中殿代東庭令拜屬星給黃櫨御袍如例云々

〔按〕今年聖算二十五御徳日は卯酉なり

八日申壬權に後七日御修法を停む太元帥法例の如し  
尋て御修法を東寺に追行す

〔非藏人日記〕正月八日壬申御修法御延引太元帥法  
理性院修行御撫物被出

來十四日午刻三寶院門跡御加持參内之旨議奏卿

被申渡也

三月八日辛未於東寺被行御修法ニ付御撫物被出

依之朝餉女房塞有之

〔公卿補任〕自三月八日於東寺灌頂院被行後七日御

修法式月法務并一延二阿闍梨法務前大僧正定演奉

行經之

〔後勁槐記〕正月八日自茲夜可被行後七日日法東寺灌

眞言之處法務三寶院前大僧正歡樂舊臘中寒に○歡

のふる病稱二長者理性院僧正修太元帥法當代無手次

席眞光院僧正歡樂并佛具無可勤修人體仍舊臘延

引於理性院本坊修太元法如例春但御自臺盤



因無飛香舍於內々方當役所代前廊下御世話出光

十一日太元阿闍梨へ有賜物如例春以表使被出於准后門院

ハ不賜之是又例也

十四日太元阿闍梨參上拜天顏修御撫物返上准申

依引籠准后御撫物正房卿商量

三月八日自今夜於東寺灌頂院被行後七日法阿闍

梨法務前大僧正定□御撫物自臺盤所代簾下女房

被出之准后御撫物予於鈴下自お五百受取於八景

間代奉行へ渡宮々并門院料表使持出奉行へ相渡

伴僧交名獻上結願日御加持參内奉行伺十八日十〇

の四誤日午刻被仰出了

十四日御修法結願阿闍梨御加持參上日限也中略已

半刻頃參内准后御撫物藏人左少辨被付之お五百

面會返獻畢

午刻案内後三寶院前大僧正參上自車寄近例清涼殿

取持左衛門督同非藏人山城伊豫誘引御色紙部屋代麿香間

計屏風予出會次御祈奉行出會御加持參上并中日御

武傳面會年始御祝議奏面會召止當番別段御對面

天盃事被願申内見之事予承商量專如例同半刻過

出御清涼殿代先三寶院武傳誘引經之申次自南廂參中

段拜天顏修御加持了退暫在廊下次仁和寺院家壽尊

院參下段一拜聊進修御加持過刻申次次妙心寺盤



境申次拜天顏次同物先申次同上僧名了暫入御

于御後以同所改御座為御學問所代先之兩番所總

番退當番等詰御座定當番伺天氣召三寶院三寶院

無申參下段拜聖顏了退暫在廊下入御之後於同所

賜天盃當番告之天盃御獻奉了武傳面會御禮申

置三寶院退出

〔聰長卿記〕正月十七日御修法御延引之事去日所司

代へ為心得申置候處例年大樹公へ卷數被遣候事

故御延引之子細何卜力不申遣候ハテハ如何候故

表向達吳候様以公用人申之仍議奏へ其旨申入

後七日御修法勤仕法務依所勞理二長者太元帥

法勤修次席眞光院所勞并調度邊差支ニ付理候

間御延引猶勤仕之人體有之節可被遂行之旨被

仰出候仍申入候也

十二月三十日 實久

兩人宛

右被示仍書改所司代へ令達

十五日卯三毬打を停め御吉書を御靈社に納む是日

前水戸藩主徳川齊昭關白藤原政通鷹司に由て手製の

琵琶を獻す

〔實麗卿記〕正月十五日己卯皇居三毬打被止於御吉

書ハ被納御靈社云々



〔按〕御靈社は京都寺町頭の西鞍馬口の南にあ  
り上御靈と稱す

〔徳川家記〕安政元年甲寅十一月略上齊昭は炎上後行  
宮の狹隘にして宸衷を慰め奉るへきものなきを  
憂慮し華欄の材を以て琵琶一面を手製し關白政  
通に因て之を行宮に進獻せり其書に曰く

捧鄙翰候迄寒之候殿下益御安泰被成御座奉恭  
賀候然ハ齊昭講武之暇琵琶一面手製仕候處甚  
拙劣之至ニハ候得共行宮へ進獻仕度志願ニ御  
座候間白干浮龜相添殿下迄爲相登候不苦候ハ  
ハ御周旋之程偏奉希候恐惶謹言

水戸中納言

十一月廿五日

齊昭

花押

關白藤公殿下

二白拙作之琵琶進獻仕候意味右器之腹中へ記  
候間別紙一通全御内々殿下御含迄汗貴覽候以  
上

別紙旭琵琶銘

今茲甲寅之夏皇宮罹災駐驛於外亡幾鄂虜航海  
泊攝之浪華浦淹留旬餘畿内騷然臣齊昭仰想行  
宮狹隘無以慰宸衷俯慨醜虜猖獗未能伸皇威屢  
陳鄙見於征夷府而才疎論迂未審用舍如何也齊



昭頃獲華欄材長三尺許手製琵琶一面竊謂方皇宮之災雅樂寶器得無屬烏有邪乃因關白政通獻之行宮豈敢望補寶器之闕乎萬機之暇或命侍臣彈還城之樂歌太平頌萬歲洋洋乎盈耳則內以紓宸憂外以鎮妖邪此器與有榮焉臣竊爲天下祝之  
嘉永七年冬十一月之吉

權中納言源朝臣齊昭謹識

翌安政二年乙卯正月十一日琵琶京師に達するや鷹司政通直に之を傳獻せしに叡感斜ならず渥き勅語を賜はれり同十七日政通の報答書に曰く玉章令拜誦候益御安全令恭賀候講武之御閑御

手造之琵琶一面殊木筆御詠則同日令傳獻去十五日日出仕勅語之砌不斜叡感面白仰厚可傳御沙汰外二名産別而御藥可被供御膳中略先ハ御答迄如此候也恐々謹言

正月十七日

政通

拜答

十八追申正月十一日到著直ニ傳獻候則御思惟書之寫も入天覽候御忠節之儀深嘆感ニ候尙幾久敷御祕藏厚可申述仰ニ候毎々色々御心入之品御進獻大方ならず御満足ニ候事下略

附錄



〔久我家記〕正月廿六日從橋本家内々入御覽候水戸  
侯自作之劍御短刀一振獻上無子細旨兼テ從殿下  
モ水戸へ可被仰遣存心有之處ト申儀從橋本可通  
達被示今日橋本家へ行向其旨申入置

十八日壬午和歌御會始

〔公宴御會寫〕

正月十八日御會始陽春布德

天地のよろつのみちのなれるよりつれていろま  
寸春やいくはる

讀師右大將 講師經之 發聲源宰相中將  
題者奉行等新侍從三位

〔後勁槐記〕正月十八日和歌御會始未二刻出御申刻

入御

今度小御所代上段簾中御座於中段被讀上御

端對座經之未刻出御御簾動奉行新侍從三位雅典

紅單元右大辨宰相退告召帥宮直衣讀師右大將基

資宗依所勞辭退替前大納言直衣八十一歲同新中

紅單衣講頌鷺野○野は誤前大納言直衣發聲源宰相中

納言實徳直同按察前中納言有長直發聲源宰相中

將冠胤衣講頌大原三位紅衣冠同持明院三位同奉行

講頌新侍從三位講頌左衛門督爲理衣參進講師經

之束帶讀師以下進退如例但非板敷之間無安座御製

御座以北自簾下女房被出之總詰差袴新加之輩



歌御會始也中略未下刻出御于小御所代中簾有披講讀

師右大將豐基講師經之發聲源宰相中將胤重了入御題

者奉行等新侍從三位典雅申刻許退出

〔俊克卿記〕正月十八日壬午晴辰上刻參仕和歌御會

始也粗如每例但御場所御狹少ニ付簾中出御也且

不板敷之間講師讀師不用圓座

〔中將内侍房子記〕正月十八日和歌會始八ツ過頃

頃表くし頃ちこにて言上有小頃所代上段頃寸い

れんにて在せられ頃直し衣頃はかまにて出御成

頃劔長はし履もち參らるゝ頃ろらたき有七ツま

へ頃寸るノノと濟せられ頃小頃所代にて二こん

頃盃まいる下略

〔附錄〕

〔言渡〕正月十八日新侍從三位被附以楸丸上如小註

以左馬權頭被仰出申渡候○此小久我從一位附箋に云

申渡スナリ奉行ニテ心得

御製讀師講師可被召別人哉之事不被召

御製内々拜見之事為見可

反數之事例之通

准后御歌可被讀上哉之事不被讀上

女房歌可被讀上哉之事同上

出座親王丞相點者所役講頌輩歌可被讀上哉之



事可被  
讀上

〔按〕今年數次御當座あり今其記事を略して左  
に御製を謹抄す

〔公宴御會寫〕

七月十九日擣衣

あはれさもいはん方なくきこゆるはしつか夜寒  
のきぬたうつ聲

同月廿七日祝

殿つくる其聲くのにきはひをきくにたのしきち  
よのゆく末

八月九日櫻柳交枝

佐保ひめの手引の糸の青柳になひく櫻や袖のぬ

ひもの

八十月十四日落花風

吹からに風のしわさとうらみけりおのれと花の  
ちるもましるを

十二月十八日花雪

雪ならは勻ふ春日に消ぬへしきえぬや花のさか  
りなるらん

二十三日

亥丁

秋葉山に火災を祈禳寸

當る

〔言渡〕正月十四日油小路中將參上被届以表使申入

伊豫面會遠州秋葉山臨時御祈今年已無午別而無



火災寶祚長久御祈來廿三日ヨリ一七箇日勤修被  
仰出候旨被届候

二十二〔按〕已無午は二月一日午日に當るを謂ふ蓋舊

説に已無午の年は火災多しといへり即去年

今年其支に當る故に此内旨あり油小路隆の

之を傳ふるは其執奏家たるに由る安政四年

亦京師火災の流言あり御祈例の如し即左に

附寸

〔久我家記〕安政四年五月二十四日從長橋局以大御

乳人被示内々此頃世上色々風聞有之革堂邊○寺

町九太ヨリ出火ニテ下御靈邊○革燒失ニ相成旨黒

雲下り候由ナト咄有之旁秋葉山へ年中靜謐之御  
祈被仰付度間明日中油小路中將可召設被申出即  
召設

是月右大臣藤原忠熙近衛内旨を奉して薩摩藩主島津

齊彬等に宸筆の御製を授く

宸筆御製

島津家藏

詠寄國祝 和歌

武士もこゝろあはして秋津寸の國はうこかすと

もにおさめむ

〔忠熙公記〕正月廿八日壬辰從薩摩自關東也有馬次郎右

衛門被差登今日時候見舞使ニ來ル内用向ニ付被



差登旨也内實ハ舊冬申遣置候ニ付テ也子細ハ昨  
年來格別ニ内獻物モアリ格別之叡慮ニテ宸翰ヲ  
賜旨也極密之事故得淨院ヲ以テ密々相渡スヘキ  
旨申置

〔鳥津家文書〕

齊興朝臣齊彬朝臣か國政にあつき心さしを叡感  
齊淺からすつねノ仰こと、もありしにこたひ武  
士も心あはしての御製を御懷紙に宸筆染られて  
傳へよとあつき仰ありしをかしくみて  
武士のこゝろも君かめくみもてけにいやまし  
に國やおさめんとつたなき筆ことほも後のしる

しにもならむとかき添て傳へ侍るもの也

安政二とせの春 右大臣忠熙

宰相との  
中將との

〔備考〕

〔史談速記録〕

明治廿七年四月舊薩摩藩士市來四郎演說

御製を齊興齊彬

に賜りましたは安政二年三月の事と見えますが  
日は分りませぬ安政元年の春齊彬は參府致しま  
した其途次伏見驛滞在中例の如く近衛家に參殿  
致しましたさうです云々何か國事上の御談がご



ざりまして夫に對しての事でもござりましたか  
と考へられます一説に其時齊彬は何か密奏致し  
ましたと申事でござります當時御苦心の折でも  
ござりますし意見書の趣餘程叡感あらせられた  
と申事でござります然して齊彬は江戸に出まし  
て後近衛家より御密書が参りまして宸翰と勅詠  
を下されたから誰ぞ拜受の爲め人を遣はせと忠  
熙公から仰遣されたさうでござります其處で齊  
彬は納戸奉行有馬次郎右衛門と申者を上京致さ  
せまして御製と宸翰を拜受致しましたと見えま  
す○前後略

二月七日

庚子

異星西方に見はる

〔言成卿記〕

二月七日降雨入夜晴異星顯西方天凶可

恐

○此事他書  
に所見なし

十四日

丁未

紫宸殿代右大臣藤原忠熙

近衛

第に渡御櫻花

を觀給ひ御製を忠熙に賜ふ

宸筆御製

近衛家藏

安政二年きさらきなかの四日かねて約し置た  
る近衛の亭に行むかひ名にしおふ糸さくらを  
見て

昔より名にはきけとも今日みればむへめかれせ  
ぬ糸さくらかな



見れどあかぬ風をすかたの糸さくら花のいろ香  
は長々し日もちかぢきよき日や春の光をみかき  
をのつからこゝろも花に勻ふまていとに櫻の咲  
つゝく頃の春の光をみかきよき日や春の光をみかき  
青柳の千すちのいとに香をこめてさくかとおも  
ふ花のいく本  
いとさくらいと長き日もくり返し風のまにノ  
なひく花房十なひく花房  
午の時ころよりときノ雨ふりければ  
是もまたあかぬなかめとなりて鳧さくらかいと  
にかゝる春さめ

いと櫻いとよりかけてふる雨にはなの色香もろ  
ふこゝちせりふこゝちせり  
またノ雨は晴て日かけもはなの上に照ろへ  
村さめの晴行あとに春の日やはなの光をみかき  
添つゝ添つゝ  
春さめの晴ゆく跡のいとさくらかすろふ花や露  
のしら玉のしら玉  
黄鳥小蝶など花にたはむるゝも又興ありて  
花の香をめつるこゝろかいと櫻いとのかにも  
あろふ小蝶はあろふ小蝶は



糸さくら枝つたひする緑鳥のをのか羽色は若葉  
とも見ゆ  
咲つゝく花の色香をしたひてやいとにみたるゝ  
春のうくひす

春夕景にも成ぬれば酒のたくひとりかはし今日  
添はめつらしく男方を召寄花の宴催さすときに  
林右のおほい臣より數々儲物ありければ喜のあ  
まりかくろ有臈

花のときあふてふさへも嬉しきをこゝろつくし  
の人のなさけは  
高塚に菓子肴物など盛ありろの取合松藤の作

もの有けるを見て  
けふこゝに千世を重ねてたつ松にちきりてめく  
れ春のさかつき  
松ふちのたてる姿を種としてこはの花も咲さ  
かふらん  
夕景にもなりて猶更空もとく晴日影もうつろ  
ひし氣色又たくひなければ  
花のうへに夕日のかけのうつろひてさらに色ま  
寸庭の面かな  
日のかけはおさまる頃のはなの上をさらにてら  
していつる月哉



色みえぬたろかれ時の花の上にほのめきわたる  
けふの月影はさきとさきと影のけふの土さきさきと  
追くにきつゝしく盃もへたてなくめぐりて  
やはらくる人のこゝろも花ゆへと猶よをかけて  
めくるさかつきとさきとさきとさきとさきと  
とく暮て月も光ろひさやかにはなをてらす氣  
色又たくひなくおほえつゝありけふはさきと  
けたれけむ春のよなからかすまぬは月もさくら  
の花の色かにさきとさきとさきとさきと  
誠まことに雪月花ひとつの氣色のたもしろさに  
雪ゆきとのみ梢えだに花のさく色もみかきろへたる月の

かけかな  
其より庭へ下たち木の本に打つとひて  
この本に打つとひつゝなかめてもこゝろの花の  
色は勻ひとはす  
月のかけ花の光もいやましてはるとはみえぬ庭  
の面おもてかな  
おもしろやさすさかつきに影みえて月もかすま  
ぬはなの下かけ  
何なにこどもおもひ忘れて月のかけはなの色香を更  
にめてつゝ  
雪かともみゆる計はかりに咲みちてにはに色ろふ花の



上の月  
又もとの所へかへりつ、盃のめくる餘り人て  
手折し花を冠にかさす我にも右のおほい臣の  
かさして  
さかつきのめくれるまゝに庭さくら手折し花を  
われも挿しつ  
たもとにも勻ひと、めん手折つ、花をかさして  
うたふ宮人  
何かとなかき酒宴になりぬるほどに  
かへるへき家路あすれていつ迄もはなにめくら  
す春のさかつき

警固も揃ぬれは名残おしくもかへらん  
いつまでも何あするへきこの殿の花さくら木の  
今日のなかめは  
名残あれやあかぬ心を木の本のはなにどゝめて  
かへる夜の空  
安政二乙卯年仲春仲四日

於陽明家感花宴面白慶悦之餘詠之

百廿二代孫

御名

公宴御會寫



公二月十四日御遊御當座

又絲櫻

糸さくら春の手引の永き日もくり返し花のなか  
めろへつ、家懸茶室面白、對之繪結之  
又春懷の眼、半軒春會四日、さくら手折も  
皆人のこゝろも花の紐とけてへたてぬ中の春の  
さかつき、心ち木の木の、  
今日同日御遊御當座 後座 花映日  
さく花に空もかすみて香に勻ふ日かけのとけき  
春へなりけり

〔後勁槐記〕二月十四日辰半刻許内々渡御陽明家

仰有

兩役各參内大臣依御所先御座小書院其后移御寢

殿右尤殿下殿為内沙汰撤紫宸殿代御座敷疊設御帖不

家仰示職合事且昨日塞廣等幡被參陽明女房祇候略中和歌御當座首二

卿通撰進絲櫻昨日春懷雅久右大臣殿以下參進殿下雖不皇

奉居之配御題後御陪膳源大納言役送通善朝臣奉行

左大辨宰相有今日御當座無人申半刻許召男方供

御膳大寺陪膳右大將權大納言光成源大納言徳一同

有仰於御前賜酒肴數酌于時前庭絲櫻盛開臨暮月

勻木陰右大臣殿種々有獻物又於御前御慰可頂戴

臣下一同被送臺物一頗大綱一臺寸もし盡數盃之後郢

曲謠等有之音尤更亦組題三十首有御當座宰奉行中源



將題者 子刻頃還御

實久卿記二月十四日丁未晴時々小雨申刻後晴今

日有召午刻後參皇居今日内々渡御于南殿代已初

御 此亭絲櫻盛也有叡覽申刻許召御前内々有和歌

當座御會通題二組題三十飛鳥井前大納言撰進之

源大納言被供御題右大臣以下賜參上歌人予御題

懷以上通題 其後内々有御宴供御膳御陪膳人々右

寄雪花組題 被右大臣以下各賜之杯酌數巡有天酌御雜話有之

入夜月明照花添御興了子下刻御宴了還御右大臣

如供奉 付女房畏申退出于時丑初刻也今

俊克卿記二月十四日丁未晴時々小雨今日陽明家

へ女房往來實ハ内々渡御也予卯半刻參入絲櫻滿

開也御興宴有之御當座有之下略

按後亦南殿代に渡御和歌御會あり左に御製

の二三を謹録し併せて其記事を類舉す

公宴御會寫

三月四日御遊御當座惜花

散すもあれ花はいく春かはらねとことし見はや

すわれを思は、

五月九日御遊御當座郭公過

朝くらや木の丸どのにあらずとも名のりてすき

よ山ほと、きす



同月二十八日御遊御當座述懷依人

深き淵うすき氷のいましめにひ、にわか身をか

へりみつゝも

〔後勁槐記〕三月四日辰刻過内々渡御

長卿等及近習供奉御當座

御陪膳基久卿撰進奉御當座

善朝臣雅久卿撰進奉御當座

御製五首關白以下點者親王於小書院有御座

丞相大中納言三首參議散御座

位殿上御作法ハ右ノ御手ニテ一枚ツ、御取遊ハ

シ左ノ御手ニ御移シ遊ハシ取重テ右御手ニテ御

懷中飛鳥井門弟左ノ手ニテ一枚ツ、取右ノ手ニ

移シ取重テ懷中冷泉門弟右ノ手ニテ一枚ツ、懷

中アトノ一枚ハ懷中セス持退陽明門弟烏丸門弟

等皆御作法ニ同シ

〔聰長卿記〕三月四日陰夜雨辰刻過近衛殿へ渡御御

廊下御通行也

御劍隆詔朝臣廣橋前大納言御前行廊下御通行也

御將予近習衆修理職奉行二人等御當座

御題酒菓拜領

〔實久卿記〕三月廿四日丁亥雨辰下刻晴今日巳下刻

和宮令參皇居給

御隨從今日内々渡御于南殿代

辰刻許出御云々敏宮令參皇居給兩宮同令參南殿

代給

御不退出未下刻召御前内々有和歌當座御會

組題

御首左衛門督撰進之

略亥刻許還御云々

五月九日庚午今日内々渡御于南殿代

廿八日己丑今日内々渡御于南殿代也辰下刻出御



供奉如例未下刻召御前有和歌當座御會關白以下  
參上人々歌人賜之組題勅題百首

六月十七日戊申今日内々渡御于南殿代也辰下刻

出御供奉如例未下刻召御前有和歌當座御會略中子

初刻還御

廿九日庚申今日内々渡御于南殿代辰下刻殿下以

下參上人々如例略中賜酒肴右御所二出御殿下以下

被候杯酌數巡有天酌略中亥下刻還御供奉如例但殿座

主宮内相  
府早出

七月廿三日甲申今日内々渡御于南殿代也辰下刻

出御供奉如例未下刻召御前和歌當座御會有之略中

還御亥下刻云々

八月七日丁酉今日内々渡御于南殿代辰下刻出御

供奉如例未下刻召御前和歌當座御會有之略中子初

刻還御

〔附錄〕

〔久我家記〕三月二日於御前申上過日陽明家渡御之

砌入夜餘程移漏二付來四日被爲成候ハ、夜分御

早還御被爲在候様申上之處於上毛御悅成夕々御

早還御被遊卜ノ御沙汰也幸甚

〔按〕九月廿日十月七日も亦南殿代に渡御あり

別に其日に掲ぐ



十五日戊申假皇居に依て涅槃會の捧物を停む

〔外様言渡〕正月十五日來月涅槃於當年ハ可不及捧物之旨源大納言被申渡候事

〔按〕涅槃會の事は弘化四年二月十五日及明年二月十五日の條參照すへし

二十三日丙辰頻年異船渡來去歲内裏燒亡諸國地震等の事を以て伊勢一社奉幣日時定の儀を行ひ即日使王神祇伯資訓川白等を遣して幣帛を奉らしむ

〔言渡〕二月廿二日兩宮神寶有御覽内々之儀神寶設

上段御茵供中段事具先關白殿内覽專奉行職其後

御塞殘番御宜旨言上兒出御前男房不候御覽訖入

御解御塞職事等神寶如元納辛櫃明朝迄於調進方守護旨奉行被届

廿三日辰一點許可始陣儀被仰出頭辨申渡小時勘文以掌侍奏聞同刻半過出御之旨同上向々申渡先

宣命草附内侍奏覽了出御于小御所代宣命御覽御服此間告使還參奉行言上先是宣命返給上卿退出

代於西廂御拜閉出御方警固附以兒申上御手水女房奉仕次渡御中殿

已半過御幣無異發遣之旨神宮上卿奉行辨等言上以表使申入

〔實萬公記〕二月廿三日伊勢一社奉幣日時定并發遣



上卿右大臣忠熙參議右大辨宰相資宗辨胤保朝臣右頭

中辨王使神祇伯從四位下兼行侍從資訓王中臣正三

位行神祇大副兼伊勢權守大中臣朝臣教忠齋部從

五位上齋部宿禰能弘奉行職事光愛朝臣頭左中辨

王使累年用代官兵庫寮川今度因舊貫被用王氏

正官可謂珍重聰長卿被勘進神祇伯為王使例人

勅使王神祇伯從四位下顯廣王

日時定陣儀吉時已刻云々然而早速被行之依假皇

居以近衛家中門廊為陣座去年以來已如此陣儀不

及見辰下刻於小御所代著御御裝束山科前大納言

延房等御手水女房供之了出御于清凉殿代西廂有

御拜了入御

仰詞

近年夷船度々渡來已去秋近海來京畿程不遠人情

不安加以六月十一月畿內并諸國地震津浪之變災

餘動未止愈深被惱宸襟因茲神明早施冥睭可為天

下泰平寶祚長久武運延長國體安穩萬民娛樂之由

宜令作宣命

夫伊勢奉幣使發遣儀

上卿著仗座兼日依奉參議著橫敷座

次上卿令官人敷軾職事來仰仰詞由於國共參官

次上卿令官人召辨仰仰詞官代



次辨進日時勘文上卿披見

次上卿令官人傳仰外記可持參宮由外記持參宮置

次上卿前

次上卿入勘文於宮

次上卿令官人召職事賜勘文仰可內覽奏聞由王氏

次職事奏聞訖返給上卿披見職事仰仰詞謝樂由

次上卿令官人召辨賜勘文辨披見結申上卿仰仰詞

次上卿令官人召外記返給宮此便仰神祇官使使可

催儲由

次上卿令官人召大內記仰宣命趣

次職事來下內藏寮請奏上卿披見職事仰仰詞

次上卿令官人召辨下請奏辨披見結申上卿仰仰詞

次大內記進宣命草入上卿披見

次上卿令官人召職事賜宣命草仰可內覽奏聞由

次職事奏聞訖返給仰可令清書之由

次上卿令官人召大內記仰可清書由

次外記參小庭申使王御馬之事

次大內記持參宣命清書入上卿披見訖賜內記

次上卿起座進弓場內記持附職事奏聞此次奏使王

御馬事

次職事奏聞訖返給仰使王御馬事聞食由

次上卿賜宮於內記向神祇官代



次參議起座

次神祇官代儀

先辨史以下著北廳代座有幣裏之事

上卿參向入南門著座辨外記史出立同門外上卿向

辨相揖

次上卿令召使召辨問幣物具否辨申具由

次上卿令召使召外記問使使參否外記申候由此次

次仰可賜使王御馬之由

次上卿令召使傳仰可持參宣命之由內記內記捧宣

命立側

次上卿以下移著北廳代座內記持宣命相從置上卿

前退著座

次上卿仰辨令催發遣御幣發遣上卿以下平伏

次上卿令召使召使王賜宣命

次上卿召內記令撤筥

次上卿起座

先是辨以下起座出立南門外

於南門外向辨相揖退出

後勁槐記

正月十三日一社奉幣兩宮別幣

御鏡金銀幣行事官

出納調進

之外被准弘安四年例於公卿勅使ハ荒祭宮へ

獅子形可有御奉納哉愚存注一紙覽殿下之處亭里召

御前小安殿代無其所且弘安例ハ爲蒙古國征伐御

祈也今度ハ爲平穩御祈也被立三姓使可然哉并使

王是迄河越被仰下候へ共非王之間此度白川參向



可宜候幼少故可爲如何哉權大納言被申候へ<sub>凡</sub>職  
掌之儀宣命之趣告申候ハ、宜候且又下行公卿勅  
使之例石三百ニテ關東濟來候へ共當時之儀禮はろ  
のをこらむよりはむしろけんせよト經書ニアリ  
然ハ公卿勅使モ可被立之處殿上之王使可宜候又  
又不遠辛酉甲子可相回候其節ニハ獅子形御奉納  
可有之併尙御時議可伺由被命  
大此獅子形平將門亂之時初御奉納其後度々御奉  
納有之自何頃哉無之中絶之處享和元年公卿勅  
大使之節御再興ニテ御奉納天保度彼宮燒亡之節  
燒其后未無之間予可有御奉納所存申上也然而

殿下不令同意給不力及者也

廿八日一社奉幣發遣日時内勘文賜御點二月廿三日  
丙辰時

<sub>巳</sub>但昨日殿下垂命ニハ日時定陣之儀日時召内勘

文三日賜御點奉行胤保發遣廿三日奉行光愛朝臣

然處寬保元明和八等各日時定同日發遣ニテ別日

陣之儀無之但由奉幣ナトニハ相分レ候例有之候

源亞相與武傳示談殿下へ行向告事由以左馬權頭

申上日時定同日發遣廿三日御治定相成了

二月廿二日兩宮神寶御覽先小御所代上中下段四

方懸御簾卷次神寶行列出納行職事等神寶設上段

御座御齒設中段事具先殿下内覽其後出御女房兩役



不召御前殿下內覽計職事同前暫而叡覽相濟職事

等如舊納辛櫃明日迄於調進方守護

廿三日伊勢臨時奉幣發遣也辰刻許右大臣殿著仗

座直端右大辨宰相宗資候橫敷胤保在床子藏人頭參陣

有之奉行伺職事光愛朝臣仰仰詞伊勢奉幣日云々

日時清書勘文去日陰陽頭清書附光愛朝臣朝臣預

申今朝內々以六位藏人渡座頭史仍晴雄朝臣無參

仕無之行也勘文附掌侍奏聞返給上卿披見仰仰詞申勘

レニヨ了卷調文之後又仰云近年夷宣命朝臣作進長

草以掌侍奏上卿不參弓場其後出御于小御所代于

時上卿立弓場附宣命於光愛朝臣朝臣參小御所代

奏直奏使王御馬次著御御服山科前大納言池了御

手水女房告使歸來旨奉行言上當番以上次渡御御光

朝臣予職前行經之供御詣草至朝餉邊御拜如舊年

了還御初准

今日幣物及上卿以下向神祇官代路出石藥師門經

梨木町高倉裏門之處板圍寺町丸太町橋吉田道云

云如賀茂祭路頭不淨之

宣命上卿召伯於膝突賜之於樓門下授中臣中臣持

向神宮讀上官符八伯持參之由發駕以下守位次之

由今夜草津宿之由

上卿以女房奉書賜御肴攝家大臣上卿



〔聽長卿記〕正月廿九日一社奉幣下行之事所司代へ  
以一封申遣如左

伊勢一社奉幣使此度ハ格別之御願被爲在候御  
事故三姓之内王使白川侍從へ可被仰付且又公  
卿勅使之節ヨリハ御減ニ候得共神寶モ御奉納  
被爲在候間寛保度之二百石ニ加増凡二百石計  
有之候様致度猶委細ハ追テ可申入候間宜御取  
計有之度候事

二月二日一社奉幣下行二百石寛保例王使白川且神  
寶等有之二百石増所司代承知也下行草帳可被申  
付頭辨へ月番被示

十一日一社奉幣金銀御幣料金判金二枚從御内儀  
被出銀二十枚從口向

之内白銀二十枚兼テ附武士へ申渡置新吹可然  
但難調時

調獻如數相整候旨賄頭申

出議奏へ申入

〔實麗卿記〕二月廿三日丙辰晴今日一社奉幣發遣近年

異船度々津浪等依御願云々也上卿右大臣忠參議

右大辨宰相辨胤保朝臣奉幣使四姓王資訓王中臣  
教忠卿忌部能

弘下部如奉行光愛朝臣云々宣命官符等續左

天皇我詔旨止掛畏岐伊勢乃度會乃五十鈴乃河

上乃下津磐根尔大宮柱廣敷立氏高天原尔千木

高知氏稱辭定奉留天照坐皇大神乃廣前尔恐美







岐皇大神此狀乎平久安久聞食氏天皇我朝廷乎

寶位無動久常磐堅磐尔夜守日守尔護幸給比國

家安穩尔萬民娛樂尔恤助給倍恐美恐美申賜者

止申

太政官符伊勢國

應預奉兩大神宮幣帛并神寶等事

使王神祇伯從四位下兼行侍從資訓王

中臣正三位行神祇大副兼伊勢權守大中臣朝臣教忠

右大臣宣奉勅為奉

兩大神宮幣帛并神寶等差件等人宛使發遣如件國

宜承知依宣行之符到奉行

正四位上行右中辨藤原朝臣判

修理東大寺大佛長官從四位上行中務權少輔主殿頭兼左大史小槻宿禰判奉

安政二年二月二十三日

〔非藏人日記〕二月廿三日丙辰晴神宮一社奉幣日時

定陣之儀被用陽明家寢殿陣上卿近衛右大臣忠熙

公參議日野右大辨宰相資宗卿大內記東坊城夏長

朝臣奉行職事柳原頭辨光愛朝臣此餘神宮上卿辨

參侍王使白川神祇伯資訓王齋部中臣使參向如例

幣陣被始辰刻過一已前御門外人留之事修理職へ申付

兼日番頭代ヨリ有命修理職豫內玄關邊ニ待出御

辰半一刻過中殿代ニテ宣命奏聞有之陣終而上卿以下



自陽明家寢殿被行向于神祇官代此時於中殿代西  
廣椽南殿有御拜圓座敷設一切無之自神祇官代直ニ發遣

〔久我家記〕二月三十日一社奉幣使歸京之日也子刻  
迄ニ歸京候ハ、雖入夜今晚中可言上之旨殿下被  
示仍祭主へ申入王使以下ハ頭辨へ申遣酉刻過歸  
京被届早速參内言上一如例幣也

〔備考〕

〔聰長卿記〕正月十日異船二艘志州鳥羽浦相見候處

飛帆紀州浦之方相廻候由注進候内々之旨肥前守

○附武士申出殿下へ申入十二日肥前守申之紀州浦候

亞船ニ候舊冬船之行  
衛相尋候事ト被察候

十二日伊勢浦異船四艘相見候餘程大船之由何國  
之船ニ候哉難相分候旨昨日町奉行噂候由肥前守

噂申後聞清國之船全津浪ニ出  
逢飄著之由無相違旨也

三月二十日目付大久保右近將監上京中大隅守附○

武役宅へ來面會異船御要害臺場從攝州至播州彼

是出來可仕又守衛之大名モ追々可被仰付候間於  
京都必々御安心被爲在候様無急度御噂申上候旨  
大隅守申之殿下へ内  
内申入置



Blank page with vertical lines for text.

孝明天皇紀卷五十八

安政二年

卯乙

三月三日

寅丙

鬪鷄を停む

俊克卿記三月三日丙寅雨依假皇居無鬪鷄獻上參賀如例

勝長卿記三月三日丙寅今日鬪鷄御覽之處於當年者無此儀仍廻文不到來云々依皇居御狹小無其所故歟

十三日

子丙

妙心寺開基關山に宸筆の追諡を賜ふ

言渡

正月廿八日妙心寺關山國師加號之事

來未年遠忌

右衛門督被附

舉狀一卷例書

殿下内覽濟由日限ハ

十二日

ニ

願度綸旨白紙

ニ

願度旨被示

二月十七日上



依請勅許近日可  
賜宸翰被仰出

二月廿日妙心寺開山國師加號草大内記被附以左  
馬權頭上被止御前旨被仰出

三月廿五日妙心寺開山關山國師五百回忌加號宸  
翰以左馬權頭被出右衛門督召設兩役列座於八景  
間代授之

〔勝長卿記〕三月廿五日戊子家君長○愛依召令參内給

妙心寺開山國師號御宸翰賜之議奏傳奏列座於八  
景間代被相渡當番議奏正面東西二傳奏議奏列座  
之由自當番議奏橋本前亞相被相渡云々御宸翰左  
之通檀紙上包ヒモ等同紙也に○宸翰寫闕を收む

安政六年九月十日去安政二年三月廿五日御宸翰  
降下ニ相成其節從家公被命御宸翰寫御取寄ニ相  
成候處頓ト不見當候ニ付今日一山へ更御宸翰寫  
所望ニ遣尤以家僕狀申遣云々則一紙直ニ持參候  
事如左大奉書一枚卷地也

本有圓成佛心覺照大定聖應光德勝妙自性天真  
普國師其道德歷朝稱之今當五百年遠忌朕亦時染  
兔毫累諡曰無量光國師  
安政二年三月十三日  
微笑塔下

〔按〕無量光の上に放の字脱歟姑く原寫に従ふ



又文久三年に至り妙心寺派の僧に諡號を賜  
へり今左に附收す

〔當職内覽中之記〕文久三年二月十九日從高辻大内  
記殿妙心寺派雪堂和尚禪師號勅許ニ付勅書草并  
清書等内覽

勅妙心開山放無量光國師遙胄雪堂和尚佛眼神  
足大龍奮迅平林護國會孫寶珠收歸石室引宗派  
於洛西源學徒向道注慈雨於關左野賢哲欽風示  
寂二百五十年忌辰將近遺化百千萬億劫光明曷  
窮不堪叡感諡曰神照慈眼禪師

文久三年二月十六日

三月四日高辻少納言殿御出妙心寺派禪師號勅書  
草清書等内覽

勅正法正胤護國禪師宣揚祖宗教撫人傑陰資王  
度其偉矣其嗣慈功照其孫佛眼化儀各別道德維  
同宜哉法門師表朝家所稱朕前日聞其曾孫雪堂  
之風追感之餘簡以徽號不日又奏其遙孫要峯念  
座元行業者夫傳心印印真空知見月朗紹先覺覺  
後覺慈愛海深其遨戲也金龍引金風其文彩也寶  
樹連寶珠是可嘉尚仍諡寶覺佛印禪師

文久三年二月廿二日

〔言渡〕文久三年二月二十日菅少納言被附

雪堂和尚  
禪師號勅



書草内 以藤丸伺如何申渡候小時同朝臣清書獻上  
内覽濟 寫添 濟 以藤丸上被止御前候旨被仰出申渡

廿一日妙心寺諡禪師號勅書以藤丸被出藏人左少

辨召設於八景間相渡御硯蓋以

三月四日大内記被附要峰和尚禪師號以篤丸上如

伺被申出申渡候小時同朝臣清書獻上寫添以同兒上

被止御前其由申渡五日勅書以篤丸被出藏人

十五日戊寅躑躅御覽臨時和歌御會

〔公宴御會寫〕

三月十五日御當座樹陰卯花

生しけり月さしいらぬこの本にまかふ光やさけ

るうのはな

同日御當座後座躑躅

へたてなく内まで照寸岩つ、し花に火かけもろ

むけてろみる

〔久我家記〕三月十五日今日内々御當座臨期被催予

暫殘居候様以兒被仰出今日躑躅御花見云々關白

右大臣座主宮内大臣等被召勅題之方○樹陰御座

有之後座之方無御座短冊賜番所也即詠進

〔中將内侍房子記〕三月十五日内々御當座にてあ

らせられ小關白右府右座主宮内府右出座

あらせられ庭つ、しの花を覽にてあらせら



れ内一こん進せられ内にきノ、しく内樂もあら  
せられ内退出のせつ内つ、み物進せられ内今  
日の内當座内題戴内なり

[按]後座の御題は 左題者冷泉 躑躅二十首にして

初句の頭に「やりみつ」のなかめをろへてつ、  
しききつ、く」の一字を用ふ

十八日巳辛下御靈社正遷宮權右中辨藤原長順葉室之に

莅む是日新造内裏木作始地曳の儀を行ふ

[公卿補任]二月九日下御靈社正遷宮日時定 息消 上卿

萬里小路中納言辨長順奉行胤保朝臣

三月十八日下御靈社正遷宮辨長順參向

[按]下御靈社は京都寺町通丸太町の南に在り

崇道天皇伊豫親王藤原夫人吉子橘逸勢文屋

宮田麻呂吉備眞備藤原廣嗣菅原道眞を祭り

享保十七年十一月遺勅に因て靈元天皇を合

祀すと云ふ 地誌提要

[非藏人日記]三月十一日甲戌雨午後晴造内裏地曳

木作始日時定陣之儀也上卿三條大納言實萬卿奉

行柳原頭辨光愛朝臣辨葉室辨長順於陽明家寢殿

陣被始 巳一刻  
半前

[實萬公記]三月十一日造内裏木作始地曳等日時定

也上卿實萬奉仰巳前刻參入于假皇居 裝束如常無  
文帶蒔繪劍



紺地緒乘前駟二人自餘如例更得職事告之後至近

雜色六人車副二駟入四足門之下轅向入化德門代

衛家四足門後乘駟入四足門之下轅向入化德門代

南脇著仗座以中門廊內擬之上依行事如次第訖從敷政

門代為之中門退出官辨座在狹少之揖過難雨儀砌上無路南

步之後令取之造內裏木作始地曳等日時定次第

上卿著仗座與職事來仰仰詞造內裏木作始地曳等

也

次上卿移著外座令官人敷膝突如先度奉行之時不定

也

次上卿令官人召辨仰日時事權右中辨此方

次辨持參日時勘文二禮籠上卿披見畢辨退

次上卿令官人仰外記外記參レ可持參宮之由外記

持參宮上卿入勘文於宮置了目外寄宮入勘文

次上卿令官人召辨內覽覽仰云內奏聞畢返給御辨持所

覽被免內上卿披見結申據於愚昧御記又結一如通辨仰

仰詞勘申ニ

次上卿下日時於辨目辨止欲起辨結申予辨結一詞云初時

上卿仰仰詞

次上卿令官人仰外記外記レニ可撤宮之由外記撤宮

次上卿令官人撤膝突無此

次上卿起座



〔實久卿記〕三月十一日甲戌造内裏木作始地曳日時  
定陣也上卿權大納言實萬辨長順奉行職事光愛朝臣  
來十八日巳刻木作始同日午刻地曳被仰出了  
十八日辛巳雨巳刻計參皇居今日造内裏木作始地  
曳也巳刻中山大納言大原三位前右大辨以上修理  
等參向

〔造内裏御用帳〕三月十八日今日木作始巳刻地曳午刻等  
也奉行參上中山殿重德裏少時從附武士案内有之  
候趣從取次告來候旨申出且執次勘使修理職等先  
へ令參向候ハ、如何哉相尋候ニ付可爲勝手相答  
候少時奉行參向巳半刻頃同伴中山殿重德裏紫

宸殿前庭假屋ニ著座如圖先木造始引續地曳并規  
等無滯被遂直歸參午半頃無異儀被遂行候旨附議  
卿光成言上且恐悅申上以表使申

〔安政新内裏造營細記〕

木造始之式 三月十八日

一玉女

右御殿地ニ荒菰ヲ敷神壇ヲ構向ニ幣ヲ建前ニ  
神酒熨斗昆布鹽鯛ヲ備右ノ御規式被仰出次第  
神主ノ棟梁衣冠ヲ著壇ニ向兩段再拜清祓仕祭  
神勸請申捧神酒三度典供シ祝詞ヲ申奉幣散米  
三度祈念シ祝詞ヲ申兩段再拜而退



一柱本

右御殿地ニ荒菰ヲ敷壇ヲ構向ニ幣ヲ立前ニ神酒熨斗昆布鹽鯛ヲ備木造始木直シ有之祭主ノ棟梁衣冠ヲ著壇ニ向兩段再拜清祓仕祭神勸請申捧神酒三度典供シ祝詞ヲ申兩段再拜而退次ニ墨壺曲尺直シ退次ニ墨掛糸引ノ棟梁三人衣冠ヲ著木造始木口割ノ式有之墨壺曲尺持入次ニ木直シノ棟梁二人かい木ヲ直シ退次ニ鉦直シノ棟梁鉦ヲ持出壇ニ向ヒ兩段再拜祝詞ヲ申散米木造始鉦立三度祈念シ祝詞申兩段再拜而退次ニ鉦直シノ棟梁鉦ヲ持入

一御地曳之式

右御殿地荒菰ヲ敷向ニ砂三盛仕右ノ傍ニ鋤鍬ヲ置祭神勸請ノ御規式被仰出次第祭主ノ棟梁清祓仕鋤鍬ヲ以三盛ノ砂引平均候テ退尤右ノ砂ヲ除置御地形平均ノ節御殿地へ蒔申候

附錄

示羊記 七月七日庚午禁中御造營御用懸勘定奉行

石河土佐守去正月江戸發足勢州海岸泉州海岸等見分了昨日上京云々御造營御用掛一箇之大事也然而勢州泉州等海防見分相兼頗寬怠之事也當時武臣不敬都而如此是公家過寬宥之故也可歎



十九日壬午石清水臨時祭假皇居に依て宮中の儀を略し一舞を復す

〔公卿補任〕三月十九日石清水臨時祭假皇居之間儀使

左權少將實在朝臣宣命奏上卿二條大納言奉行胤

保朝臣同夜於社頭御神樂

〔非藏人日記〕三月十九日壬午雨午刻前ヨリ晴石清

水臨時祭也奉行職事頭辨胤保朝臣以下侍中總參

使滋野井少將實在朝臣以下舞人加陪從陣上卿二

條大納言殿以下參著於陽明家也御禊卯半一出御

于中殿代其儀訖而使以下被進前庭賜挿頭樂所發

物聲云々自餘御作法訖而辰刻入御庭座東之使以下被

復陽明家

〔實麗卿記〕三月十九日壬午今日石清水臨時祭也一

如昨年北祭云々宣命奏聞上卿二條大納言齊敬有辭

別兩度奏聞云々實美朝臣被仰一舞之事一如去冬

云々今日宣命續左

天皇我詔止掛畏岐石清水尔御座世留八幡大菩薩

乃廣前尔恐美恐美申賜倍止申久去天祿元年與利始

天奉出給布宇都乃御幣乎正四位下行左近衛權

少將藤原朝臣實在乎差使氏令捧持氏東遊走馬

調備氏奉出賜布掛畏岐大菩薩平久安久聞食氏

天皇朝廷乎寶位無動久常磐堅磐尔夜守尔日守



爾護幸倍給比天下國家乎平久安久守幸賜止倍恐  
美恐毛美申賜止者久申辭別氏申久去年乃四月尔不  
慮毛內裏火乃災尔罹利外尔行幸志給氏便宜乃  
所毛尔志假乃皇居止定給者倍今日毛殿庭乃敷設乎  
備氏禮乎盡乎古止得給止者禰御幣已下者任例尔奉  
進給布掛畏岐大菩薩此狀乎平久安久聞食止恐  
美恐毛美申賜止者久申  
安政二年三月十九日  
宣命奏聞上卿二條大納言齊敬  
使左少將實在朝臣  
舞人侍從博房左兵衛佐勳光侍從實美左馬權頭敬

直藏人左將監大江俊堅藏人左將監大江俊昌  
加倍從左少將基安朝臣右馬權頭繼仲朝臣備中守  
俊良近衛家右馬助有栖川宮諸大夫○原記名を  
義節なり  
所作陪從哥忠誠筆策季資笛景繁和琴久嘉  
人長安倍季愛

〔久我家記〕三月十九日今日石清水臨時祭也中殿代  
修理職勘使等檢知届候卯半刻計於小御所代著御

御服山科前大納言奉仕次御手水女房渡御中殿代

女房自當間著御御禊御座孫廂代北面供御座關白

兩頭次胤保朝臣供御笏光愛朝臣供御贖物長順



宮主良祥朝臣持大麻跪切妻下光愛朝臣取之參進  
供之吻御訖返賜光愛朝臣退授宮主次宮主著庭中  
座次使左權少將實在朝臣同著座次舞人行一事四引立  
御馬次有御解除事宮主奉仕祓詞訖退陪從於弓場  
次舞人引出御馬此間撤御贖物最前次使進案下  
捧御幣御拜訖使置御幣退次胤保朝臣進申出  
御笏次入御准初次於弓場代經之頒挿頭花出納取傳  
陪從每人頒之陪從取集授之一加次胤保朝臣於朝餉簾下  
奉仰降南廊代召實美傳仰可令奉仕一舞之由舞人  
侍代次上卿二條大納言著仗座以陽明家中胤保朝  
臣仰宣命辭別之趣今度假皇居之間被略宮中儀幣

宣命 上卿移端座召大內記夏長 仰仰詞次少內記職

進宣命草○原記此間辭別を 以胤保朝臣奏聞返給

仰可清書之由次上卿召內記仰清書事內記退進清

書次上卿進立弓場代以胤保朝臣奏聞返給仰御覽

訖由次上卿還著座召實在朝臣賜宣命訖退出次使

進發外擬陽明家四脚門 如例但依假皇居 向社頭

按石清水臨時祭恆例と異なる所あるを以て

二十特に之を掲ぐ又今年の賀茂祭近衛使の調度

小異あるのみにて宮中の作法等例年の如し

故に別掲せ寸左に其記事を附す

〔實麗卿記〕四月十七日己酉晴今日賀茂祭也近衛使



左中將定功朝臣著染裝束二藍半臂皇居之儀如例

年云々又使不具牽馬唐鞍不置傘用菅是等之事殿

下御命云々御假皇居

二十七日庚寅郢曲御稽古始前權中納言源有長綾小路之

に侍寸尋て催馬樂及神樂を習はせ給ふ

後勁槐記三月十日郢曲内々被爲遊度思召候按察

使可被申上尤致急度候儀二ハ無之旨殿下被傳仰

云々十一日當番萬里小路

廿七日按察前中納言郢曲被聞召二付參上獻譜即

召御前

主上郢曲被遊候儀稀事歟光格帝内々ハ被遊候

由所傳聞也享保之頃之御例歟之旨云々

五月十五日按察前中納言參上此頃催馬樂御稽古

被爲有候二付笏拍子入錦袋新調有之二付獻上不

苦哉殿下へ被申入候由内覽之處無子細被命候二

付獻上并安名尊譜無御沙汰候へ共書付同上被附

以左馬權頭上則召御前

中將内侍房子記安政三年四月十一日あやの小路

あせち辰より神樂庭火傳授申上らるゝ

言渡安政四年十一月九日按察前中納言面會今日

神樂星ノ曲御譜面初テ獻上之旨但御傳授ト申二

テハ無之候右之儀殿下太閤等へモ被申上候處御



當役へモ可被申上兩公御命有之由ニ付被届

二十九日辰壬大覺寺前大僧正亮深遷化廢朝三日先是

亮深の病危篤に至るを以て准三宮及牛車等の宣旨  
を賜ふ

〔公卿補任〕三月廿七日准三宮牛車等宣下前大僧正亮深消息

上卿右大將辨長順奉行胤保朝臣

〔有栖川宮日記〕三月廿九日壬辰大覺寺瑜伽定院准

三宮宣下一昨廿七日相濟今午刻過中務大輔久隆

朝臣衣冠 詔書持參中務少丞隨從束帶 設之間へ案内

中略 申次右馬助義節衣冠 出會之處准三宮施行詔書

持參候間御加署可給之旨被申伸中略 詔書寫依御所

望被上

勅不旌德則勸善之道缺焉不致賞則報功之典廢

矣爰前大僧正亮深身出華胄夙入峨山其性寬容

其風峻峻常轉法輪輓回佛祖太古之風大挑慈燈

照破勞生長夜之暗况又齡及七旬德聞十方誠是

法海之寶筏密藏之金樞嘉其徽猷應其令聞不加

崇範恐違舊典宜准三宮加年官年爵授封戶千戶

一遵先式主者施行

安政二年三月廿七日

二品行中務卿幟仁親王宣

正四位下行中務大輔臣下部久隆奉



正五位下行中務少輔臣藤原資生行

〔實久卿記〕三月廿七日庚寅今日瑜伽定院前大僧正

亮深大覺寺先住准三宮聽牛車

廿九日壬辰瑜伽定院准后自先達所勞到今日大切

之由自武傳卿被示予披露後刻今日申刻薨去旨同

上予奏之依之自今日三箇日廢朝被仰下不被下御簾

〔聰長卿記〕三月廿九日瑜伽定院准后所勞甚六个敷

旨中略申刻許薨去之旨坊官屈無容體書右府公○近衛忠照叔

父假服屈等被附中略右府公直別勅出仕被仰下是寢

殿被用紫宸殿代之故也

〔示羊記〕三月廿七日庚寅瑜伽定院大覺寺門跡隱居初春之

頃實遷化然而有子細于今不露顯今日准三宮宣下

消息上卿右大將云々

廿九日壬辰瑜伽定院准后宣下勅書今日持參借請

輪門里坊於此所被請久隆朝臣參向此所云々入夜

酉半刻許薨奏右大臣殿叔父也假服屈書即別勅除服出仕

被仰下其後廢朝云々

### 是春地數震寸

〔言成卿記〕正月二日地震微動二度計

四日地震微動

六日地震微動

七日地震微々



廿九日地震微々

二月一日地震二度

伏見邊  
重云々  
聊

四日降雨地震

五日降雨微震

十七日陰晴不定地震

計三个  
云々度

三月五日陰晴不定地震

聊重  
嚴

廿四日晴地震二度







